



知って考えて実践する

国際看護

近藤麻理 著

定価 1890 円 (本体 1800 円 + 税 5%)

医学書院

TEL.03-3817-5657

門間典子

東北大学病院 看護部長

被災地で生きる 「国際看護」の考え方

皆さんは「国際看護」という言葉から何を思い浮かべるだろうか？ 国際看護＝青年海外協力隊、とか、英語がペラペラ、と思っははいないだろうか？ 実は私がそうだった。「英会話できないし、この年齢(!?)になって海外で看護活動はしないから、関係ない」と思っていた。

著者の近藤麻理先生との出会いは、2010（平成22）年の“アメリカの病院における看護管理と継続教育”研修がきっかけだった。海外での看護経験を熱く語る近藤先生の話はおもしろかったが、そのときはやはり、自分とは無縁のことと思っていた。本書を手にして「ふーん、国際看護って文化や考え方、生活習慣の違いを理解することから始まるのね」とパラパラと読み終わったところ、東日本大震災が起きた。

3月11日午後2時46分、そのとき私は岩手県の沿岸部にいた。長い大きな揺れのあと停電になり、津波警報が鳴り続けるなかで暗くて寒い夜を過ごした。交通網は寸断され、携帯電話もつながらない。大きな余震が続き、仙台に帰らなくては、と焦る気持ちとはうらはらに、さらに数日をそこで過ごした。仙台に戻ったとき、私がすべきことを考えながら、またこの本を読みなおした。

被災直後の避難所で見聞きしたこと、仙台の病院に戻ってから時々刻々と変わる現場の状況を肌で感じながら、今まさにこのときに「国際看護」の考え方が必要だということに気づいたのだ。

日本人のなかでも 多様な価値観を受容する

本書に以下のようなことが書かれている。「大規模災害により情報の不均衡が起こり、援助者もまた被災者であるという事実が忘れられ、援助する側・される側というステレオタイプがつくりだされる。看護する側は、正確な情報を集め、そこにある現実をしっかりとみつけ、そして対象の多様性に配慮することが必要となる」。まさにその通りで、報道では『被災地』というくり方をされるが、その地域によりニーズや価値観が違うことに援助する側、される側が共に戸惑っていた。国際看護では、人種や言語・宗教の違いにより価値観が異なることについては推測可能であろう。しかし日本人のなかでも価値観は多様である。被災地のまっただなかで暮らしてみても、今さらながらそれに気づいた。このとき「多様な人間の価値観や文化の差異を知るにより、摩擦や誤解が減少し、相互の良好なコミュニケーションが可能となり、質の高い看護ケアが提供できる」というダイバーシティ（diversity）、すなわち多様性あるいは多様性の受容が重要となる。

かつて新人類という言葉があったが、ますます世代間のギャップが広がっているように思う。看護管理者はこれを受け入れたうえで、人材育成を行なうことを求められている。さまざまなものが多様化している現代だからこそ、看護管理者は国際看護の考え方を学ぶことが必要なのではないだろうか。